

---

# 魔法先生ネギまZ！

ハジケ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法先生ネギまZ！

### 【Nコード】

N4774Z

### 【作者名】

ハジケ

### 【あらすじ】

とある姫がネギまの世界に舞い降りた！彼女は人を鍛えるのがめちゃくちゃ上手い！彼女はめちゃくちゃ強い！だが重要な戦いは鍛え上げた弟子に大体任せる！それが彼女である！

## プロローグ（前書き）

この小説を読んだらどうか感想をください。  
お願いします。

アドバイスをなどをいっぱいください！

## プロローグ

今、ある女性が超天才科学者の部屋の前に来ていた。

この女性が超天才科学者の部屋に来ていたのは暇だからである。

「博士、部屋に入ってよろしいかしら？まあ駄目と言っても入りま  
すけど。」

ガチャ。

有無を言わずにこの女性は部屋に入った。

「ちよっ！？今は次元転送装置の調整を・・・そもそも今は入っ  
ちや駄目ってゆう貼り紙が扉に貼ってなかったかい！？」

「別に貼ってませんでしたわ？」

ブーウ ブーウ ブーウ

「ヤバッ！？」

「あら？」

カツ！シューウウウ……

「次元転送装置がちよっと暴走して転送しちゃったよ……まっ、い  
つか。」

博士の次元転送装置の暴走により女性は何処かの次元へと転送して  
しまったのだった。

「ちっ！あのクソ科学者あ！よくも転送装置暴走させやがりましたわね！！」

勝手に入ったこの女性の責任だと思っがこの女性は科学者に責任転嫁をした。まさに暴君。

「……………今何かちょっとイラつとしましたけど……………まあ気にしないで今はこの世界の事を把握する事が大事ですわね。」

この女性はこの世界を把握する為に辺りを歩き始めた。

「とりあえずは人を見つけて話をする事ですね。情報収集には人との会話が一番ですわ。」

この女性はどうやらこの世界を知るにあたってまずは人探しを始めた様だ。

「人…人…ん？本をたくさん持つてる子がいますわね。あの子に聞くとしましょうか……………あら？」

この女性が本をたくさん持つてる子と話をするためにその子に近づこうとすると本を持つてる子は階段で足をくじき階段から落ちようとしていた。

「ちっ、仕方ないですわね。」

この女性は凄まじいスピードで階段から落ちようとした子をキャッ

手して助けた。

「おい、大丈夫ですか？」

女性は一応、安否を聞いた。

「は、はい大丈夫です……。」

「じゃあもう貴女を降ろしますわ。」

この女性が本を持つてる子を降ろした直後。

少年が女性に近づいて来た。

「あ、あの宮崎さんを助けてくれてありがとうございます！」

「別にどうって事じゃないから礼なんていりませんわ。」

女性は全然たいした事はしていないという顔をしている。女性は、あつ、という顔に突然なった。

「そういえばこの世界の事を聞こうとして人を探していたんですね。」

この女性は自分の目的をちょっと忘れていた様だ。少年が女性にある事を聞いた。

「一つ聞いていいですか？」

「聞かせたら、ちょっと私も聞いてよろしいかしら？」

「あつ、はい……その頭の上の輪っかはなんですか？」

少年は女性の頭の上に浮いている輪っかの事を聞いた。女性はそれに普通に答えた。

「そりゃ死んでるからに決まってるでしょう…因みに肉体はありま  
すわよ。」

「ええ！？死んでるって!？」

少年は驚いた……まあ普通は驚くだろう死んでる人が歩いていたら。

「てかこの輪っか見えますの？普通の人には見えない様にしてくら  
っているんですけど？魔法で。」

少年は魔法という言葉に反応した。

「魔法って!？ちょっとこっちへ来てください。」

少年は女性を連れて木が茂ってる人目がつきにくい場所に移動した。

「何故こんな場所に移動したのかしら？まあ話を聞かせてもらえら  
なら別に何処だろうと構いませんが。」

「貴女は何故魔法を知っているんですか!？」

「私達の世界では普通に皆知っているからです。」

「私達の世界!？」

少年は女性の私達の世界という言葉が気になった。

「…私はこの世界の住人ではありませんのよ？異界人ですわね。こ  
の世界の人達にとっては。」

少年はいきなりに聞いた事なので女性の言った事はすぐには信じら  
れなかった。

「そんな事をいきなり言われても……。」

「まあ、普通はすぐに信じる事は無理ですわね。そうとうバカか柔軟性が高い人でないと。」

「そうとうバカっていりますか……?」

「口答えすると殴ります。」

「ええ!？」

少年は女性がそんな事をさらっと言ったの驚いてビビった。

しかし女性は少年がビビったのを無視して話を続ける。

「この世界にも魔法があるようですわね。しかし貴方の反応を見る限り秘密にしているようですわね。」

「あっ、はいその通りです。」

「じゃあそこでコソコソしてるネズミに聞かれてはまずいでしょうね。」

(えっ!？バレてる!？何!？あの人!？)

「誰か聞いてるんですか!？」

「出てきなさい!」

女性はコソコソ聞いてる奴が隠れてる茂みに向かってそう言い放った。

すると茂みからオレンジ色の髪の毛のツインテールの女子学生が出てきた。

「……あんた魔法がどうか言ってたけどもしかして魔法使い!？」

「い、いや違います……。」

少年は魔法使いと女子学生に言われて否定するが……。

「その顔は嘘をついてる顔ね!……ってことは朝のアレはあんたの仕



業ね！」

「ア、アスナさん感が鋭い!？」

「感が鋭いってことはやっぱり……。」

「あっ!?!しまった!?!」

少年は言っちゃったよと焦る……一方、女性は情報収集の会話がで  
きなくてイラついていた。

「てめーら人の情報収集を中断させてんじゃないですわよ!まずは  
私の話からですわ!」

「す……すみません……。」

「では貴方に聞きます!この世界は惑星間を行き来できる宇宙船は  
ありますか?気は一般的に知られていますか?」

「え……惑星間を行き来できる宇宙船……気……?」

「その顔じゃ無しですわね……。」

「この人、何分かんないこと言ってるの?」

「人を頭おかしい人みたいに言わないでくださる?」

女性はアスナの言葉に対して少しイラつとしてアスナを睨む。

「でもあんた異界人とか言ってたし……中二病?」

ピキッ。

「誰が…中二病ですって……?」

女性はアスナの『中二病』と言う言葉に対して激しい怒りを見せた  
……青筋が浮いている。

「だってあんた異界人とか言ってるし……それにまるでお姫さまの

様な服を着てるし……自分のことをお姫さまとか思いこんでんの？。

「

ピキッ、ピキッ。

「……私は真正正銘の姫ですわ。」

「漫画の読み……。」

ブウン……パアウ……!

女性は手に気を溜め木に向かって気弾を放った。

「誰が漫画の読み……ですって？」

「な、何あんた今何やったの!？」

「気をぶっぱ放しただけですわ……私は中二などでわなくマジなのですよ?」

女性はニッコリと笑いながらも威圧感を漂わせた表情をアスナに向ける。

「貴方とりあえず色々知ってそうな人の所へ案内してくださいませんか?」

少年に顔を向け女性は案内を頼む。少年は青ざめた顔をしていた……まあそりゃビビるだろう。

「が、学園長ならたぶん色々分かると思います……。」

「よし連れていきなさい。」

「は、はい……!」

少年はビビりながらも女性を連れて学園長の元へ向かった……アスナも一緒に何故か連れてきた少年が心配なのだろう。

「フオフオ……異界から来た人とは珍しいのーそれにネギ君この方は魔法も知っていると？」

「はい学園長確かそう言いました。それにこの人の世界では魔法は普通に知られているそうです。」

「フオフオ……かなり特殊な世界なんじゃのお。」

因みに魔法の会話をしていますがアスナは部屋の外にいます。

「じじい、この世界はどんな世界か早く教えてもらえるかしら？」

「じ、じじいって……その前に貴女の名前を教えてくださいんかのう……いちいち貴女やその方では面倒くさいじゃろう？」

「分かりましたわ、私の名はルーン＝アシユタリカ＝プラネット。ルーン姫と呼んでくださる？」

「ルーン姫殿じゃな？ワシの名は近衛近右衛門じゃ。」  
「で？貴方は？」

ルーン姫は少年に名を聞く。

「僕はネギ＝スプリングフィールドです……。」  
「ネギですわね。」

ルーン姫は少年の名をしつかりと覚える。

「ルーン姫殿はこの世界のことを知りたいんですけどな？この世界は魔法は秘密で……。」

「それは分かっているので別のことを。」

「え……じゃあ……。」

「とういかなんとなくもう分かったのでいいです。どうせ秘密利にだけど魔法使いが正義のためにとやらに動いてたりするのでしょう？この世界。」

「……………はい。」

学園長はルーン姫の理解力に度肝を抜かれた……そして思った……。

(なんでワシのところへ来たの?)

と……。

「まあ魔法がある世界なら元の世界へ戻る方法もあるかもしれないので適当にさがしますか。」

「あ、ルーン姫殿ワシらが元の世界に戻る方法を調べて見ますから教員をやって見ませんか？」

学園長は突然ルーン姫に対してそんな事をきりだした。

「何故そんなことを急に？」

「魔法関連のことを勝手に調べられると問題がありましたのお………それにルーン姫殿は異世界の方なら変わった授業が出来るのではないかと思います。」

学園長にそう言われルーン姫は一秒考えた後すぐに答えを出した。

「別にいいですわよ？そんなに急ぐことでもないですしね。それに

しても勝手に調べちゃいけないとか面倒くさい世界ですねー。」

ルーン姫は軽く学園長の案を承諾した。

「フオフオ……ではネギ君のクラスの副担として頼みますぞ。」

「えっ！？ルーン姫さん僕のクラスの副担なんですか！？」

「なにか嫌なことでも？」

ルーン姫ニツッコリ……しながらネギに聞く。

「いえ、別にありません。」

ネギはここでだって怖いからという本音を出さなかった……直感的に。

本音を出していたら殴られていただろう。

「ではルーン姫殿明日から頼みますぞ。」

「分かりましたわ……寝床は？」

「住む所ですか……うん。」

「思いつかないなら学園の敷地内に勝手に作りますわ。」

「え？家とか作れるんですか……まあいいでしょう( )どうせ掘っ立て小屋ぐらいのレベルじゃな。」

学園長は後にその考えが甘かったと後悔する。

「じゃあさっそく取り掛かりませんと……ネギ先生明日からよろしくお願いいたしますわ。」

「は、はい。」

こうしてルーン姫はネギのクラスの副担になることが決まったのだ  
った……ルーン姫はこの世界にどう影響を与えるのだろうか……。

## プロローグ（後書き）

ルーン姫「ルーン姫のどうやったら強くなれるかコーナ！強くなり  
たい人は是非私に聞きなさい！」

作者「まだ誰もいないんですけど……。」

ルーン姫「……はあ！」

ドッゴン！

作者「ごぼお！？」

ルーン姫「読者の皆さん次回もこの小説をお読みなさい！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4774z/>

---

魔法先生ネギまZ！

2011年12月16日02時49分発行